「染色 - その鮮やかな世界 -」の特集にあたって

Special Issue on "Dyeing - The Vivid and Colourful World -"

安 永 秀 計

さまざまな意味をもつ「色」という言葉の、最も一般的な語意は、色相・明度・彩度で表される感覚であろう。物質から発せられたり、それから反射してきた光がもつ情報のひとつが色である。色は多くの情報を与えるが、今日のように色とりどりのものに囲まれて生活していると色のあることが当たり前のように感じ、その情報の重要さを意識しなくなることがある。では、色がなくなったらどうであろうか？

ジョージ・ルーカスという映画監督が商業映画として最初に作った「THX-1138」という作品がある。この映画の物語に出てくる人々は、全員髪を剃り、THX-1138 などという商品コードのような名前しか持っていない個性を抑圧された存在である。そして、地下世界に住んでいるその人々は白い衣類しか着用していない。また、部屋や廊下の天井・壁・床の全てが白なのである。どこに行っても白また白で、色が見えるのは機械のランプ類くらいである。実際にこういう世界に住むことになったとしたら人々はどんな影響を受けるのであろうかと、色の心理学・生理学的側面について考えさせられる。

また、嗜好色の統計を取ると興味深い結果が得られている。女性は鮮やかな赤を最も好み、男性は白を好む。また、大阪では鮮やかな赤が最も好まれ、東京では白が好まれる。20歳代の人々は鮮やかな赤を最も好み、50歳代の人々は水色を好む¹⁾。このように性・地域・年齢で平均的な嗜好色が異なるだけでなく、千人いれば千様の好みの色があるはずである。このように色は個性の表現ともなるのであるか

ら、逆に先の映画のように色がない世界では個性の表現手段の一つがなく、人々はより没個性になる。

エジプトで発見された約5000年前のミイラの副葬品に藍染めのひもがあったという事実から、遠い昔から人類は衣類や装身具を染めて来たことがわかる。色をつけることは、個性の表現であったり、権力の顕示であったり、宗教的行事や祭礼での象徴的表現であったりした。また、信号機や消化器の色表示の例からも、色が安全に果たしている役割は大きいといえる。

このように色を付与することは広く深い意味をもち、特に繊維の着色としての染色にも、極めて面白い世界が広がっているといえる。色を付与する方法として、「構造」を利用したものについては、本誌第59巻2月号(2003)で興味深くかつ有益な特集が組まれた。そこで今回は、もう一つの色をつける方法である「染料」を用いた染色に関連して、染色の歴史や伝統的技法から、最新の染色加工技術やデジタルプリントシステムなどについて特集する。また、ヒトが産生する繊維である毛髪の染色や、染色の未来展望についても解説してある。染色に関する科学や技術は着実に進歩しており、これについての紹介は意義のあることと考えられる。

この特集が、ありふれていてふだん意識しない色と染色について思いを馳せるきっかけになれば幸いである。また、染色に関する科学・技術や研究・開発を理解する助けとなり、この世界に興味をもつ人が増えることを願ってやまない。

HIDEKAZU YASUNAGA
京都工芸繊維大学工芸学部物質工学科
助手、博士(工学)
〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海
道町
Tel: 075-724-7562 Fax: 075-724-7564
E-mail: yasunaga@kit.ac.jp
専門 高分子科学・染毛科学
趣味 野菜作り・山歩き

参考文献

- 1) 濱中富三ら、カラーリング技術、p45、実教出版。